

英語の仮定法現在節の統語構造とVP削除

田中, 公介
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

<https://doi.org/10.15017/6790333>

出版情報 : 九大英文学. 48, pp.87-108, 2005. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



英語の仮定法現在節の統語構造と VP 削除

田中 公介

1. はじめに - 英語の仮定法現在節の統語的特徴

本論文では、(1)に見られるような英語の仮定法現在節の統語構造を、近年の Chomsky の研究における、ミニマリスト統語論の観点から説明することを目的とする。

- (1) a. I demand that he *resign* immediately. (Chiba 1987: 2)
 b. It is impossible that he *come*. (ibid: 2)

そこで本章では、具体的な統語構造分析の導入部として、英語の仮定法現在節が担う統語的特徴を以下より概観していくこととする。

まず英語の仮定法節では、動詞類の生起に関して英語命令文と非常に類似した制限を有している。具体的には、上記(1)の各例文で見られるように、節内に現れる主語が三人称単数形であったとしても、動詞は必ず原形で現れなければならない。更に(2)に示されているように、相助動詞 *have/be* が、基底位置から Infl 位置へと移動できない。また(3)のように、*should* を除く多くの法助動詞も生起できない。¹

- (2) a. *I require that he *be* not such a fool.
 b. * He suggested that he *have* not finished the work before 10 o'clock.
 (Beukema and Coopmans 1989: 429)
 (cf. *Be not messing around when the bell rings! / *Have not eaten everything before the guests arrive!)
- (3) a. *It is imperative that you *will/ can/ must/ would/ could/ might* leave on time.
 (cf. *Will/Can/Must/Would/Could play the guitar!)
- b. I demand that he *should* be arrested. (Chiba 1987: 67)

一方、英語命令文においては生起が可能な助動詞 *do/don't* も、仮定法現在節においては生起できない。

- (4) a. *I suggest that you *do not/ don't* go alone.
b. *I order that you *do take* some pains to keep this place clean.
(cf. Don't forget my birthday! /Do everyone give it a try!)

以上のような助動詞要素の生起に関する制限は、英語の仮定法現在節において VP 削除が行えないという(5)の事実からも窺える。

- (5) a. *Kim needn't be there but it's imperative that the other organizers
 ϕ . (Potsdam 1997: 539)
b. *Ted didn't want to vacation in Hawaii but his agent suggested
 that he ϕ . (ibid.)

しかしながら、仮定法節の VP 削除の興味深い事例として、否定辞 *not* が現れている場合に VP 削除が現れるという(6)のような事実が確認されている。

- (6) a. Kim needs to be there but it is better that the other organizers not
 ϕ . (Potsdam 1997: 539)
b. Ted hoped to vacation in Liberia but his agent recommended that
 he not ϕ . (ibid.)

最後に、仮定法現在節を導入する補文標識 *that* は、(7)で示されるように省略不可能である。この特徴は平叙節を導入する補文標識 *that* が随意的に省略可能な事実とは対照的である。²

- (7) a. *I require he leave. (Ernst 1992: note14)
b. I hope he leaves.

さて、定形節と比較して、これら非常に例外的な統語的特徴を有する英語の仮定法現在節はどのような統語構造を有しているのだろうか。本論文では、(1)-(3)において確認された、英語命令文との文法的類似性を足がかりとして、それと英語の仮定法現在節とに共通した統語構造を仮定する分析を提示する。具体的には、田中 (2004)における英語命令文の統語構造分析と、Pesetsky and Torrego (2001, 2004)の助動詞の T-to-C 移動分析のそれぞれの先行研究を援用し、その統語構造がどのようなものであるかを解明する。こ

の統語構造分析の結果として、上記で確認された仮定法現在節の主たる統語的特徴が説明されることになる。

以下に本論の構成を示す。第二章では、英語命令文の統語構造に仮定される解釈可能な[IMP]素性を、英語の仮定法現在節の統語構造に応用する分析を提示し、上述の統語的特徴が説明されることを示す。³ 第三章では、英語の仮定法現在節における VP 削除の認可条件を考察し、英語の仮定法現在節の統語構造の分析を行うと同時に、その分析を基点とし、削除現象一般の認可条件に関する一考察を行う。第四章は本論のまとめである。

2. 英語の仮定法現在節の統語構造分析

本章では英語の仮定法現在節の統語構造分析を行うにあたり、最初に田中(2004)の英語命令文の統語構造分析と Pesetsky and Torrego (2001, 2004)の T-to-C 移動分析を概観する。これらの先行研究を踏まえた上で、2. 3 節より具体的な仮定法現在節の統語構造分析を行う。

2. 1. 命令文の統語構造分析：田中 (2004)

一般的に知られているように、英語命令文は動詞類の生起に関して(8)-(10)のような統語的特徴を有している。

(8) 動詞が原型で生起する

- a. Be quiet!
- b. *Are quiet!

(9) 否定文の場合に義務的に do が現れ、T-to-C 移動を行う

- a. Don't be messing around when the bell rings!
- b. *Be not messing around when the bell rings!

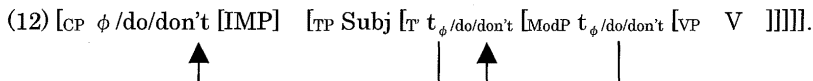
(10) 顕在的な法助動詞が生起できない

- *Will/Can/Must/Would/Could play the guitar!

以上の統語的特徴を説明するにあたって田中 (2004)は以下に説明するような統語構造分析を仮定している。まずその統語構造においては、 T^0 が補部に選択する機能範疇として、助動詞要素の音形を伴わない法助動詞、及び助動詞 *do/don't* を主要部に有する機能範疇 *ModP* があると仮定する。これらの助動詞は、*LF* インターフェイスにおいて命令文としての文タイプを決定する解釈可能な[IMP]素性を担っており、 C^0 位置までの連続循環的な移動を行う。これは英語の疑問文で、助動詞が C^0 までの移動を行うという統語的特徴と同様のものである。この結果、疑問文同様に C^0 位置に文マーカーとしての[IMP]素性が位置する事になり、命令文としての文タイプが決定される。(11)はその一般化であり、(12)はその具体的な統語構造である

(11) 田中 (2004)の英語命令文の統語構造分析のまとめ

命令文の C^0 には、疑問文の C^0 に仮定される[Q]素性と同様の強素性の[IMP]素性が存在し、これが機能範疇 *ModP* 主要部位置に基底生成する助動詞要素 ϕ /*do/don't* の移動を引き起こす。



このような統語分析の結果として、上記(8)・(10)の英語命令文の統語的特徴が説明される。まず助動詞に後続する動詞は必ず原形となるので、命令文の本動詞自体が形態的屈折を伴う事はない。次に *ModP* は相助動詞が基底生成する動詞句の上位に生起すると仮定するので、相助動詞がそれを飛び越えて T^0 位置を占めることはできない。そのような派生は *Travis* (1984)における主要部移動制約の違反である。最後に顕在的な法助動詞は解釈可能な[IMP]素性を担える語彙項目ではないので、命令文には生起しえない。

以上、ここでは英語命令文の統語構造に関する先行分析として、機能範疇 *ModP* を有する(12)のような統語構造を仮定することにより、その主な統語的特徴が導出される田中 (2004)を概観した。

2. 2. T-to-C movement : Pesetsky and Torrego (2001, 2004)

次に本論での英語の仮定法節の統語構造分析を行う上で必要な先行研究として、Pesetsky and Torrego (2001, 2004 : 以下 P&T)における T-to-C 移動分析を概観する。P&T (2001, 2004)は、(13)のような英語の WH 疑問文における主語・目的語間の非対称性を説明する為に、(14)の[uT]素性に関する仮定を立て、それが T-to-C 移動の動因となるとして(15)のような T-to-C 移動の原理を提案している。

(13) *T-to-C movement asymmetry* (Pesetsky and Torrego 2001: 357)

- a. What did Mary buy?
- b. *What Mary bought?
- c. *Who did buy the book? [* unless *did* is focused]
- d. Who bought the book?

(14) *The nature of nominative case* (Pesetsky and Torrego 2001: 361)

Nominative case is uT on D.

(15) *Motivation for T-to-C movement* (Pesetsky and Torrego 2001: 360)

C bears an uninterpretable T-feature (henceforce uT) with the EPP property.

具体的に P & T の分析を見てみると、(13)の文において CP 領域へ要素が移動する前の構造は(16)のように示される。

(16) *Structures for (13) before movement to C and [Spec, CP]* (Pesetsky and Torrego 2001: 363)

- a. [C, uT, uWH] [_{TP} [Mary uT] T [_{VP} bought what]] [(13a-b)]
- b. [C, uT, uWH] [_{TP} [who uT] T [_{VP} bought the book]] [(13c-d)]

(16a)において、C⁰の[uWH]は目的語 WH 句の CP 指定部への移動によって、

[uT]はT位置に生起する助動詞 *do* によってそれぞれ照合される。⁴次に(16b)において、C⁰の[uWH]と[uT]は主語 WH 句の CP 指定部への移動によって一度に照合される。この場合 T-to-C 移動が生じないのは(17)の移動操作における経済性の原理の所産であると P&T は考える。

(17) *Economy of movement* (Pesetsky and Torrego 2004: 498)

The EPP properties of uF on a head H are satisfied by the smallest possible number of movement operations.

この派生の経済性の原理をふまえると、C⁰の解釈不可能な二つの素性を、単一の WH 移動によって照合する統語操作と、WH 移動と助動詞要素の T-to-C 移動の組み合わせによって照合する移動においては、前者の方がより経済的である。この結果として、主語 WH 句が WH 移動を生じる場合に助動詞要素が T-to-C 移動を起こさない事実が説明される。

更に P&T(2001, 2004)では以上のような仮定を援用し、(18)のような *that-trace* 効果を説明している。

(18) *THAT-trace effect* (Pesetsky and Torrego 2001: 356)

- a. Who do you think (that) Sue met ____ ?
- b. Who do you think (*that) ____ met Sue?

(18)に見られる WH 句の取り出しに関する非対称性を説明するにあたって、P&T は(19)のように、C⁰の[uT]を照合する要素として T⁰に基底生成する補文標識の *that* を仮定している。

(19) *Nature of English that* (Pesetsky and Torrego 2004: 499)

That is not C, but a particular realization of T moved to C.

(19)をふまえて、(18)の *that-trace* 効果に関する分析を概観する。まず(18b)では、C⁰にある[uT]と[uWH]の各素性の照合に関して、前者を *that* の T-to-C

移動によって、後者を主語 WH 句の WH 移動によって、それぞれ照合する方法と、双方の素性を主語 WH 句の WH 移動によって一度に照合する方法の、二種類の方策が考えられる。これらを(17)の経済性の原理から比較した場合、余剰的な統語操作が行われていない後者の素性照合の方法がより経済的であると言える。この結果として埋め込み節の主語 WH 句が主節の文頭位置へと移動する場合に、補文標識の *that* が出現できないことが説明される。

次に(18a)では、 C^0 の[uT]と[uWH]の各素性は、前者が補文標識 *that* の T-to-C 移動もしくは埋め込み節の主語の CP 指定部への移動、の何れかの操作によって、後者が目的語 WH 句の WH 移動によって、それぞれ照合されることになる。つまり C^0 における[uT]と[uWH]の各素性は、(18b)とは対照的に必ず別個の統語操作で照合されなければならない、それ故(17)の経済性の原則が適用されえない。この結果として、 C^0 の[uT]は補文標識の *that* か埋め込み節の主語かによって照合されなければならない。換言すると、前者の派生が選択された場合は *that* が具現化され、後者の派生が選択された場合は *that* が具現化されない。このように埋め込み節の目的語 WH 句が主節の文頭位置へ移動する場合に *that-trace* 効果がないという事実は、 C^0 の[uT]と[uWH]の各素性の照合様式の違いから説明される。更に補文標識の *that* が随意的に具現化するという事実は、 C^0 の[uT]素性を照合する要素が補文標識の *that* であるか埋め込み節の主語であるか、の違いから説明される。

このような分析の結果として、(18)の *that-trace* 効果に関する非対称性は自然に説明されることになる。つまり *that-trace* 効果に見られる非対称性は、英語における T-to-C 移動と同様、統語操作に関する経済性の原理である(17)に従った、素性照合様式の相違として捉えられることになるのである。

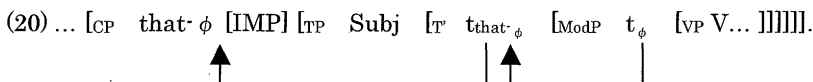
以上、P&T の T-to-C 移動分析を概観した。まとめると C^0 が義務的に担う[uT]素性の照合様式の違いから、主語・目的語の移動に関する非対称性が捉えられた。

2. 3. 英語の仮定法現在節の統語構造分析

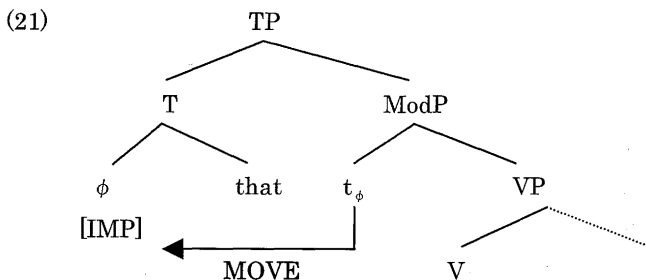
本章では先章において示した田中 (2004)の英語命令文の統語構造分析と P&T (2001, 2004)の T-to-C 移動に関する統語分析を踏襲した英語の仮定法

現在節の統語構造を提案する。

まず本論では、英語の仮定法現在節が機能範疇 **ModP** を有していると考え、その主要部位置に音形のない法助動詞 ϕ を仮定する。⁵ この ϕ は、第一章で概観したように、英語命令文と仮定法現在節が共通した統語的特徴を有している文法的事実のみならず、双方の構文の意味に「命令」や「提案」という共通の意味内容を有している点を踏まえ、解釈可能な **[IMP]** 素性を担うと仮定する。^{6,7} この要素は C^0 位置へ連続循環的な主要部移動を行う (20) のような統語派生を形成する。⁸

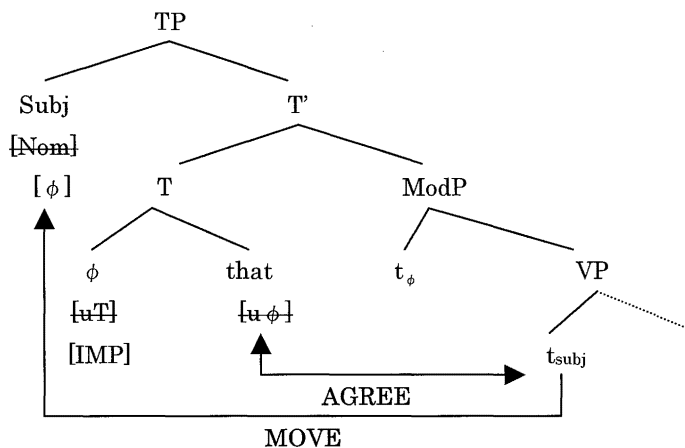


以下より具体的な分析に移る。まず、基底の **ModP** 主要部位置に生起した ϕ は T^0 位置へ移動する。先の P&T の分析で概観したように、英語の補文標識の **that** は T^0 位置に基底生成しており、 ϕ は **that** に編入される。この移動によって形成された構造が (21) である。⁹



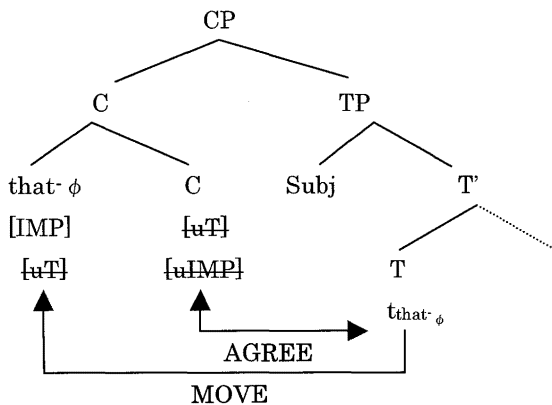
この次に、**VP** 内に基底生成した主語が同一の $[\phi]$ 素性を基準として T^0 との **Agree** を行う。 $[\phi]$ 素性は **[EPP]** の特性を担っているので、この **Agree** 関係の結果として主語が **TP** 指定部位置まで移動を行う。この図は (22) に示される。

(22)



この後、(22)に CP が Merge される。T⁰へ移動した ϕ は、C⁰位置にある解釈不可能な $[uT]$ 素性と Agree をする $[uT]$ 素性を担っている。この $[uT]$ は T との照合を済ませている素性だが、P&T が仮定した *marked for deletion* の適用を受けており、その結果 C⁰の $[uT]$ と Agree を行うことが可能であると仮定する。また、C⁰の $[uT]$ は[EPP]の特性を有しているので、この結果として *that*· ϕ が T-to-C 移動を起こす。この移動により、C⁰の $[uIMP]$ 素性が *that*· ϕ の $[IMP]$ 素性より照合を受ける。この結果として(23)の構造が現れる。

(23)



この後仮定法節は主節要素と併合し、派生が収束することになる。

さて、以上のような統語構造分析の帰結として、第一章で提示された英語の仮定法現在の各統語現象がうまく説明される。まず本動詞が必ず原形であり、助動詞要素が T^0 位置に生起しえないという特徴に関しては、法助動詞として仮定された ϕ がそれぞれの現象の答えとなる。具体的には、助動詞に後続する動詞は必然的に原形となるので、仮定法現在節の本動詞自体が屈折を伴う事はない。また相助動詞が基底生成する投射の上位に法助動詞が生起する統語構造を考えると、顕在的な相助動詞や法助動詞が T^0 位置に生起しない特徴に関しても、 ϕ がそれらの代わりをなすというように説明ができる。

最後に、仮定法現在節の *that* の削除が不可能である特徴に関して説明する。まず、P&T (2001)は *that-trace* 効果を、 C^0 の $[uT]$ 素性と $[uWH]$ 素性の照合様式の違いに即して説明した。以下に再び例を示す。

(24) *THAT-trace effect* (Pesetsky and Torrego 2001: 356)

- a. Who do you think (that) Sue met ____ ?
- b. Who do you think (*that) ____ met Sue?

(25) *Economy of movement* (Pesetsky and Torrego 2004: 498)

The EPP properties of uF on a head H are satisfied by the smallest possible number of movement operations.

繰り返しになるが、埋め込みの主語 WH 句が主節の文頭に移動する(24b)の派生は、(25)の経済性の原理によって補文標識の *that* の生起が排除される。他方埋め込みの目的語 WH 句が移動する(24a)の場合は、(25)の原理が適用されず、その結果 *that-trace* 効果が生じない。また、補文標識 *that* の生起の随意性は C^0 の $[uT]$ を照合する要素が異なる点に還元しえた。

一方仮定法現在節の場合も、 C^0 の $[uT]$ 素性と $[uIMP]$ 素性の照合に関して、(24b)の *that-trace* 効果と同様に二通りの派生が考えられる。まず、*that- ϕ* が C^0 へ移動することにより、 $[uT]$ と $[uIMP]$ の双方の素性が照合される派生と、他方、 C^0 の $[uT]$ を埋め込み節の主語が、 $[uIMP]$ を *that- ϕ* が、それぞれ

照合するという派生、の二種類である。これらの派生を(25)の経済性の原理から比較した場合、単一の移動操作により C^0 の二つの素性を照合できる前者の派生の方が経済的な派生である。更にこれらの派生のうち、英語の仮定法節における正しい語順が導出される派生は前者である。後者の派生が選択された場合、**that** が主語に後続してしまう間違った語順が形成されてしまう。このように、仮定法節の補文標識 **that** が義務的に生起するという統語的特徴に対しては、その派生が統語操作に関する経済性の原理である(25)に従った帰結として、原理的な説明を行うことが可能となる。

さて、以上のような事実は、英語の仮定法節が **that-trace** 効果を示さないという予測をもたらす。実際にそれは以下の例文によって確認される。¹⁰

- (26) a. ?Who did John ask **that** leave immediately?
 b. *Who did John ask leave immediately?

これら仮定法節の **that-trace** 効果に関する(26)の例は、定形節の(24b)の例とは全く対照的である。つまり(24b)においては埋め込み節の主語が主節の文頭位置へ移動する際に、補文標識の **that** があってはならないのに対し、同じ状況下にある(26)では **that** が存在していなければならない。

このような **that-trace** 効果に関する明確な非対称性に関しても、本論の分析は原理的な説明を与えることが可能である。既述の通り(24b)では、(25)の経済性の原理によって、 C^0 の[uT]と[uWH]が単一の WH 移動によって照合される派生が選択された結果として **that-trace** 効果が導出されることが説明された。他方、(26)の派生を考察してみると、 C^0 における[uT]と[uWH]、[uIMP]の各素性を照合する派生に関して、[uT]と[uWH]を主語 WH 句が、[uIMP]を **that- ϕ** が照合する統語派生が選択されることになる。このような派生の結果として現れる構造が(26a)のようなものである。一方(26b)では、 C^0 の[uIMP]が照合されておらず、結果として派生が収束することができない。このような C^0 における素性照合の相違が、仮定法節において **that-trace** 効果がないという(26)の事実の要因として説明されることになる。

このように、P&T (2001)の T-to-C 移動分析と田中 (2004)の[IMP]素性を

採用する統語構造分析を援用することによって、結果として仮定法現在節の補文標識 *that* が省略できず、更に仮定法現在節には *that*-trace 効果が確認されないという統語的事実に原理的な説明を与えることが可能となった。

以上、本章では英語の仮定法現在節の統語構造分析を行った。その結果として仮定法現在節の各統語的特徴を説明する事ができただけではなく、解釈可能な[IMP]素性を主要部に担う ModP を採用する統一的な統語構造分析が提示できた。また、P&T (2001)の T-to-C 移動分析を援用することにより、補文標識 *that* が共通の T-to-C 移動を行うという結論を導出でき、この結果として補文標識を担う統語構造の派生に関する統一的な分析を提案することが可能となった。次章では、仮定法現在節の VP 削除に関する認可条件を考察しつつ、その統語構造に関する更なる分析を行っていくことにする。

3. 英語の仮定法現在節と VP 削除

3. 1. 英語の仮定法現在節と VP 削除

本論の導入部で英語の仮定法現在節の統語的特徴を概観したが、その中の一つに、仮定法節内には顕在的な助動詞要素が生起し得ないという統語的特徴があった。この特徴は、仮定法節内では VP 削除が不可能であるという予測を生むこととなる。なぜなら VP 削除は(27)の例文からも分かるように、削除部分に隣接する顕在的な助動詞要素を必要とするからである。

(27) VP 削除

- a. John didn't leave but Mary did φ .
- b. *John didn't leave but Mary φ .
- c. John loves Mary but Bill can't φ .
- d. *John loves Mary but Bill φ .

実際に(28)の例は仮定法節内で VP 削除が行われている例であるが、予測通りこれらの文は非文である。

(28) 仮定法節における VP 削除 (Potsdam 1997: 539)

- a. *Kim needn't be there but it's imperative that the other organizers φ .
- b. *Ted didn't want to vacation in Hawaii but his agent suggested that he φ .

だが仮定法現在節においても VP 削除が許容される場合がある。それは文否定の *not* が VP 削除部分に隣接して生起している(29)のような場合である。

- (29) a. Kim needs to be there but it is better that the other organizers not
 ϕ . (Potsdam 1997: 539)
 b. Ted hoped to vacation in Liberia but his agent recommended that
 he not ϕ . (ibid)

Potsdam (1997)は、これら仮定法節に生起する文否定の *not* は、定形節に生起する文否定の *not* と同様に、TP と VP の間に随意的に生起する機能範疇 NegP の主要部を占める要素と仮定している。その仮定をふまえ、Potsdam (1997)は、(30)のような VP 削除の認可に関する一般化を示している。

(30) VP Ellipsis Licensing Condition (Potsdam 1997: 534)

An elided VP must be the complement of a morphologically realized head.

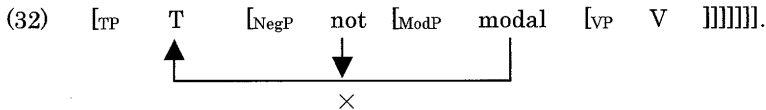
一方、本論では仮定法現在節の VP 削除の認可条件として(31)を仮定する。

(31) 英語の仮定法現在節における VP 削除の認可条件

英語の仮定法現在節における削除 VP 部は、主要部一指定部間において強い一致を起こした機能範疇 ModP から直接的に範疇選択されている場合に適正に認可されうる。¹¹

本論が(30)の VP 削除の認可条件を採用しない理由は、*not* が機能範疇 NegP の主要部位置を占めるという(30)の条件の前提を支持できない点にある。

NegP を仮定する分析では、主要部移動制約に関する問題に直面する。具体的には、英語の否定文において、助動詞要素が基底位置より T⁰ 位置へと移動する場合、それらの間に介在する NegP を飛び越えて移動を行ってしまうこととなるのである。これは主要部移動制約の違反である。



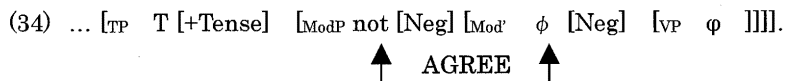
3. 2. 英語の仮定法節の VP 認可条件

以上の NegP 分析に関する問題点をふまえ、本論では、仮定法現在節に生起する文否定の *not* を扱う上で、Ernst (1992)の AdvP 分析を採用する。具体的に Ernst (1992)は、上述の懐疑的な NegP 分析を採用せずに、文否定の *not* は[+Tense]の T⁰から選択される VP の指定部位置を占める副詞類と考えている。この構造は(33)のように図示される。¹²



このような構造は NegP 分析が露呈してしまう諸問題は現れずに済む。主要部移動制約に関する問題も、*not* が指定部位置を占める副詞類と考えれば問題がなくなるし、他の文否定要素間との統語的な位置に関しても、それらは全て VP 内に生起する副詞類として一まとめに扱うことが可能となる。また何よりも、否定文を考察する上で NegP という機能範疇を仮定する必要がなくなり、統語構造構築における余剰性を排除することができる。

さて本論では以上のような Ernst (1992)の文否定の *not* に関する分析を援用する。具体的には、Ernst は助動詞要素を本動詞が生起する動詞句の上位の動詞句の主要部位置に基底生成させ、その指定部位置に否定辞 *not* を置く動詞句構造を仮定していたので、本論ではその分析を援用し、(34)のような統語構造を仮定する。つまり仮定法節における文否定要素の *not* は機能範疇 ModP の指定部位置を占めており、その主要部位置に生起する音形のない法助動詞の ϕ と主要部・指定部の関係において強い一致を起こすと仮定する。¹³



この結果として、ModP が直接的に補部に選択する削除 VP 部は適切な認可を受けることとなる。具体的には(29)のような VP 削除が容認される仮定法現在節は(34)のような統語構造を形成していると仮定されよう。

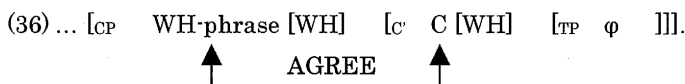
3. 3. 他の削除現象への応用

さて、以上の仮定法現在節の VP 削除の事例のように、一致を生じた機能範疇がその補部にある削除部位を認可できるという現象は他にも確認される。その一例としては(35)に示すような間接疑問縮約の例が考えられる。

(35) 間接疑問縮約(Lobeck 1995: 23)

- a. We know someone bought the Van Gogh, even though we aren't sure who ϕ .
- b. Linda tells me she is going on vacation, but when ϕ is still unclear.

この場合は、CP 指定部に位置する WH 疑問詞と C^0 との間で[WH]素性に関する強い一致が生じており、この結果として CP が直接的に補部に範疇選択する削除 TP 部を認可できると考えられる。



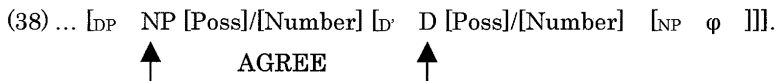
更に(37)のような NP 削除に関しても同じような説明が考えられる。

(37) NP 削除 (Lobeck 1995: 23)

- a. John calls on these students because he is irritated with those ϕ .
- b. We tested many wines, and I thought that some ϕ were extremely dry.

Lobeck (1995)と同じように、仮に NP の構造を、機能範疇 DP が NP を従属

化している統語構造を考えると、DP 指定部位置にある所有格名詞句と D⁰ との間で[Poss]もしくは[Number]に関する強い一致が形成されており、それがその補部にある削除 NP 部を認可していると考えられるであろう。

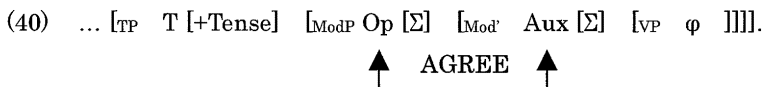


次に定形節の VP 削除の事例を観察してみる。(27)の事例でも確認されたように、定形節の削除 VP 部は顕在的な助動詞要素による認可を必要とする。

(39) VP 削除

- a. John didn't leave but Mary did ϕ .
- b. John loves Mary but Bill can't ϕ .
- c. Mary is leaving, and John is/has ϕ too.

本論で提示した機能範疇 ModP が定形節においても投射するものと仮定すると、これらの助動詞要素は ModP の主要部位置に基底生成し、その後 TP 主要部位置まで移動を起こすものと考えられる。この場合、削除 VP 部がどのように認可されるのかを考えなくてはならない。そこで本稿では、機能範疇 ModP の指定部位置に音形を持たない Σ -operator があるものと仮定し、それが主要部に存在する助動詞要素と一致を生じている(40)のような構造を提案する。¹⁴ この場合、null operator と助動詞は、Laka (1990)における[Σ]素性に関する一致を生じていると仮定する。¹⁵



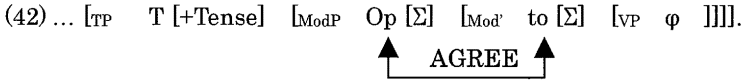
よって(39)では(40)のような強い一致が生じていると考えられる。

最後に(41)のような不定詞の to が生起する場合の VP 削除に関して考察してみる。

(41) 不定詞節内における VP 削除 (Lobeck 1995: 165)

Even though he doesn't like to ϕ , Ron jogs every day.

この事実を説明するにあたって、本論では不定詞の *to* は *ModP* の主要部に基底生成すると仮定する。具体的には、不定詞の *to* は非定形なので T^0 との一致を生じる $[uT]$ 素性を有してはいないが、その指定部位置にある Σ -operator と一致を生じる $[u\Sigma]$ 素性を有していると仮定する。この結果として不定詞の *to* は T^0 位置へ移動できないが、(43)のように *ModP* の指定部位置にあるオペレータとは一致を生じることが可能となる。つまり VP 削除が適格な(41)は(42)のような構造を有していると考えられる。



以上のような削除現象は、削除部位の認可に関する一般原理として(43)のようにまとめられる。

(43) 削除部位の認可に関する一般原理

削除部位は強い一致を生じている機能範疇から直接的に語彙選択されていないなければならない。

本章をまとめると、仮定法現在節の VP 削除の事例を分析することを足がかりとして、機能範疇の投射内での強い一致がその補部の削除部分を認可することができるという、削除現象一般に関する統語構造分析を行うことにより、(43)のような削除部位の認可に関する統語的な原理を提案することが可能となった。更には、否定辞 *not* を主要部とする *NegP* を仮定する分析を採用せず、それをオペレータとして *ModP* の指定部位置に生起する要素であると仮定することにより、統一的な統語構造を仮定することが可能となった。

4. まとめ

本論では英語の仮定法現在節の統語構造分析を通じて、以下の帰結を導き出す事が出来た。まず、英語の仮定法現在節の統語構造には、田中 (2004) の英語命令文の統語構造分析と同様に、その主要部に[IMP]素性を担う助動詞要素を有する機能範疇 ModP が仮定され、その結果として、動詞の屈折が不可能であるという点や助動詞要素の T⁰ 位置への移動の不可能であるという点といった、両者の類似した統語的特徴が説明されることとなった。

その中でも特に、英語の仮定法現在節の *that* の省略が不可能であるという点と、*that*-trace 効果が見られないという点に関して、田中 (2004) と P&T (2001, 2004) を援用することにより、それらの文法的な特徴に対して原理的な説明が与えられた。具体的には、C⁰ が担う [uT] や [uWH]、[uIMP] といった各素性の照合に関して、どのような統語操作がより経済的にそれらの素性を照合できるか、という統語派生に関する経済性の原理が関与していることとして説明された。

また、この分析の帰結として、田中 (2004) の英語命令文の統語構造分析と P&T (2001, 2004) の T-to-C 移動分析に関する経験的な正当性が示されることとなった。

最後に、仮定法節の *not* が VP 削除を認可することができるという現象に関して、NegP の代わりに ModP を採用した統語構造を仮定することにより、その認可条件を提示できた。具体的には機能範疇 ModP 内での強い一致が、その補部である VP 部分の削除を認可することができるというものである。また、このような分析は間接疑問削除や NP 削除などの他の削除可能にも援用することが可能であるということを示した結果として、削除現象に関する統語的な一般化として(43)の原理を提案することができた。

以上、本論文における一連の統語構造分析では、機能範疇 ModP を採用した統語構造分析を行ってきた。その統語構造上の立場に関しては、今後更なる分析を行わなければならないことは自明であろうが、ModP を採用することにより英語の命令文や仮定法現在節の統語的特徴のみならず、VP 削除をはじめとする削除現象一般に関する文法的事実を説明することが可能となったわけであり、その意味において本論は ModP の経験的な立場を立証する上

での有効な一指針を提示したということになる。

註

1. should は専らイギリス英語において生起する。詳しくは Chiba (1987)を参照。
2. Chomsky and Lasnik (1977:485-486)も、同様の指摘をしている。
3. この[IMP]素性は C^0 へ移動し、その後 LF インターフェイスにおいて意味内容が付与されると考える。
4. この場合、統語構造を形成する節点を locality の単位と考えると、 T^0 の助動詞より TP 指定部の主語の方が C^0 により近い。だが P & T は、 C^0 の補部全体が C^0 にとっての牽引の対象である場合、補部の主要部が移動を生じるものと仮定し、以下の主要部移動制約に関する一般原理を提案している。
 - (i) Head Movement Generalization (Pesetsky and Torrego 2001: 362)
Suppose a head H attracts a feature of XP as part of a movement operation.
 - a. If XP is the complement of H, copy the head of X into the local domain of H.
 - b. Otherwise, copy XP into the local domain of H
 また、 C^0 に移動する以前に助動詞の[uT]素性は T^0 より照合されているが、それは以下のような“marked for deletion”の原理に従うとされている。
 - (ii) “Once an uninterpretable feature F on X has attracted, F is said to be *deleted*. We will sometimes use the clumsier phrase *marked for deletion* because (as we will show) the final disappearance of F on X may be delayed until a later point of derivation.” (Pesetsky and Torrego 2001: 360: 1-4)
5. 同様の分析には Roberts (1985)がある。
6. 英語の仮定法現在節の統語構造分析の先行研究で、本論と同様に機能範疇 ModP を仮定したものとしては野村 (2002)が挙げられる。具体的に野村 (2002)の分析は(i)のようにまとめられる。
 - (i) 現代英語の仮定法現在節の諸現象は、ModP (法助動詞句) 主要部に基底生成された不可視の法助動詞 (= [+Subj] と [+Pres]の素性) が素性照合の為に T (最終的には C) まで移動していることの帰結である。
 一方本論は野村の提案する仮定法現在節独自の[SUBJ]素性は仮定しない。
7. 通言語的にも命令文と仮定法との類似点は確認されうる。Zanuttini (1997)や Han (2001)は、イタリア語・近代ギリシャ語・スペイン語等の言語において否定命令文の場合に、本動詞が仮定法の屈折を担う場合があるという事実を示している。
8. Chomsky (1995: 240)によると、 C^0 位置は文のタイプが決定され、LF インターフェイスにおいて[IMP]や[Q]といった形式素性が担う force や modality の解釈上の位置

として見なされている統語的な位置である。

9. 定形節では T が音形を有さない場合があるのに対し、(21)のような仮定法節ではそれが許されないのは何故だろうか。本論では仮定法節の ModP 主要部位置に生起する音形を伴わない助動詞 ϕ が接辞的な特性を有しており、それを形態的に具現化する上で T には顕在的な *that* が生起しておかなければならないというように考える。
10. (26)の例は筆者のアメリカ人インフォーマントによる判断である。なお、そのインフォーマントは以下のような Chiba (1987)において非文として扱われている例に関しても文法的であると判断している。

(i) a. The book which Joseph asked that be ready by all of us is not available at the library.

b. She was reading a book, one of Merrin's that she'd asked that be delivered to the house.

このような言語事実が確認された一方において、以上のような文の容認性は話者によって違いが生じるということも事実である。それ故データの精査は自身の今後の研究の課題とする。

11. 「強い一致」とは以下のように定義される。

(i) Strong Agreement (Lobeck 1995: 51)

An X-0 is specified for 'strong' agreement iff X-0, or the phrase or head with which X-0 agrees, morphologically realizes agreement in a productive number of cases.

12. [+Tense] selects (i) main verb, or (ii) [+Aux] with optional *not* in Spec. (Ernst 1992: 127)

13. 助動詞と否定要素との一致に関しては、Zwicky and Pullum (1983)や Roberts (1998)がある。これらの分析では、音形を伴う助動詞要素が、NegP を具現化する Σ P との一致を起す解釈不可能な[u Σ]素性を担っており、これが否定要素との一致を司ると仮定されている。

14. 相助動詞は、不定詞に後続できると同時に独自の屈折を伴うことができる点において、どちらかと言えば本動詞に類似した統語的性質を備えている。よってそれを他の法助動詞と同様に扱うことは問題かもしれない。この対処としては、相助動詞は ModP ではなく相助動詞句 AspP の主要部位置に基底生成するか、より一般的な多重 VP 句の主要部位置に基底生成する可能性を示唆しておく。もちろん、何れの投射の指定部位置にも本稿で仮定した Σ -operator が生起しており、相助動詞との一致を生じているものと仮定する。

15. 実際にこのオペレータは、Laka (1990)で仮定されている Σ P 投射のように、否定辞

not として具現化されたり、強調の素性[EMPH]が付与されたりするものと仮定する。前者が生起する場合は本文(34)の仮定法節の統語構造同様に、主要部にある助動詞と一致を生じることになる。後者に関しては助動詞 do と一致する場合と、強調の不変化詞 so として具現化する場合が挙げられる。なお、以下のように強調の不変化詞も VP 削除を認可できる。

(i) Billy doesn't like artichokes. Yes, he does so ϕ ! (Potsdam 1998: 98)

この場合も本文と同様に、ModP 内での強い一致が削除 VP 部を認可していると考えられる。

参考文献

- Beukema, F & Coopmans, P. (1989). "A Government-binding Perspective on the Imperative in English," *Journal of Linguistics* 25. 417-436.
- Chiba, S. (1987). *Present Subjunctives in Present-Day English*, Shinozaki Shorin, Tokyo
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- . (2000). "Minimalist Inquiries: The Framework," In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, eds., *Step by Step*. Cambridge, Mass.:MIT Press
- . (2001a). "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. By Michael Kenstowicz, 1-52, MIT. Press, Cambridge, Mass
- . (2001b). "Beyond Explanatory Adequacy," MIT occasional papers in linguistics 20. Cambridge, MA: MIT
- Chomsky, N and Lasnik, H. (1977). "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504
- Ernst, T. (1992) "The Phrase Structure of English Negation," *The Linguistic review* 9. 109-144
- Han, C.-H. (2001). "Force, Negation and Imperatives". *The linguistic Review* 18. 289-325.
- Laka, I. (1990). *Negation in Syntax: on the Nature of Functional Categories and Projections*. Ph.D. dissertation, MIT

- Lobeck, A. (1995). *Ellipsis: Functional Heads, Licensing and Identification*. Oxford, New York.
- 野村 忠夫(2002). 「ModP (法助動詞句) 仮説と NegP」. 『論集』第 26 号. 83-108. 青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻
- Pesetsky, D. and Torrego, E. (2001). "T to-C Movement: Causes and Consequences," *Ken Hale: A Life in Language*, Michael Kenstowicz, eds., 355-426, MIT. Press, Cambridge, Mass
- . (2004). "Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories," *The Syntax of Time*. Jacqueline Gueron and Jacqueline Lecarme, eds., 495-537, MIT. Press, Cambridge, Mass
- Potsdam, E. (1997). "NegP and Subjunctive complements in English," *Linguistic Inquiry* 28, 533-541.
- . (1998). *Syntactic Issues in the English Imperative*. Garland Publishing Co. New York
- Roberts, I. (1985). "Agreement Parameters and the Development of English modal Auxiliaries," *Natural Language and linguistic Theory* 3, 21-58
- . (1998). "Have/Be Raising, Move F, and Procrastinate," *Linguistic Inquiry* 29. 113-125
- 田中 公介(2004). 「命令文の統語構造と機能範疇 ModP」『九大英文学』第 47 号 117-136. 九州大学大学院 英語学・英文学研究会
- Travis, L. (1984). *Parameters and Effects of Word Order Variation*. Ph.D. dissertation, MIT
- Ukaji, M. (1978). *Imperative Sentences in Early Modern English*. Kaitakusya, Tokyo.
- Zanuttini, R. (1997). *Negation and Clausal Structure: A Comparative Study of Romance Languages*. Oxford, New York
- Zwicky, A. and K. Pullum. (1983). "Cliticization vs. Inflection: English n't," *Language* 59. 502-513.